島根大農研報 (Bull. Fac. Agr. Shimane Univ.) **14** : 23－30, 1980

# 森林美学の原理に関する基礎的研究

山　科　健　二*

Kenji YAMASHINA

Grundlagenforschung über den Grundbegriff der Forstästhetik

## I　緒　　論

森林美学について論究するには，まず美学の概念に関して考察する必要がある．人類の脳神経系統が進化し美を感ずるようになってから永い年月を経てきたと思われる．そして"美"と"人間の意識"の相互作用は，人間の進化の過程において注目さるべきことである．美が人間自身の心を高め，豊かにし，社会的に貢献している事実を重視すべきである．また一方，人間は美しいとはどういうものであるかについて思索し続けてきたのである．まさに美を追究することができるのは，人間の進化の証左ともいえるのである．

井島[1]は「美学は，倫理学や形而上学のように，古くから独立した学問的自覚をもって樹立されていたわけではない．今日，美学 (Ästhetik) の名をもって呼ばれている独自の学問が誕生したのは1750年にドイツで公刊されたバウムガルテン (Alxander Gottlieb Baumgarten) の著 "Aesthetica" に端を発しているのである」と言い．また，「外国語の Aesthetics, Ästhetik, Esthétique が邦訳されて "美学" と呼ばれたのは明治16，17年に中江兆民がフランスの美学者ヴェロン (Véron) の美学書を2巻に翻訳して "維氏美学" と題したりしたのが，比較的早い先例である．明治4，5年頃には，西周の"佳趣論"とか"美妙学" というような訳語があった．その後，明治25年以降にも，森鷗外は"審美学"と呼び，高山樗牛や島村抱月などは"美学"と称した．今日では，最も普通に "美学" と呼びならわしている」と，わが国で "美学" という用語がつかわれるにいたった経過について記している．

しかし，これは近世初期以後の "美学" についてである．さかのぼれば紀元前5世紀までのギリシヤ人は美意識にとみ，美に関する種々の表現形式を残したのである．そして，プラトン，アリストテレス，プロティノス等が美学について関心を示した．その後，古典後期の美学，中世の美学，ルネサンスの芸術論と詩学，そして美学を学問として体系づけたバウムガルテンの美学 (1714－1762)，カント (1727－1804)，シラー(1759－1805)，ヘーゲル (1770－1831) 等を経て，「新カント派の美学」，「生の哲学の美学」，「表現学としての美学」，「存在論的美学」等種々の学説がだされてきたのである．[2]

特に，ヘーゲル[3]は「芸術美は精神から生れたものであるから自然美より高級なものである」との思想をもっていた．ヘーゲルは形而上学的観念論の立場から，自然美を軽視したのである．

これに対して，「唯物論の立場から，ヘーゲルとは反対に，芸術美に対する自然美の優位を主張しているのがチェルヌイシェフスキーである．彼の立場は，基本的には現実は芸術より先行するという事実を踏まえている．自然美とはこの現実の生活における美であり，したがって，チェルヌイシェフスキーにとって芸術美は自然美に迫ることはできても自然美よりもすぐれたものにはなりえないのである[4]」と芸術至上主義のヘーゲルを批判し，自然美の優位を強調している．しかしながら，歴史的にみると，多くの美学者が芸術美を自然美より高く評価しているのが実情である．"美"と"人間" の関連を問題とする場合，芸術美に理論の一貫性を求める心理は理解できるが，自然美に対する洞察と理論も芸術美同様に重視されるべきであると思う．自然美は人間存在の以前からあり，人間が意識的に作りあげたものではないという特質があるにしても．

阿部[5]は「美学は "美" の学である．従って又その反対

* 森林計画学研究室

なる“醜”の学である．美とは山や川や草や人や，建築や絵画や彫刻や一凡そ我等の感覚に訴ふる物象の性質である．併し美が物象の性質であるといふのは，緑若くは青が或物象の性質であるといふのとは意味を異にする．我等は我等の美的評価の根拠がその物象の中に与えられているとき，初めてそれを美と呼ぶのである．故に美は物象に根拠を有すると同時に，又評価する主観の中にその根拠を持っている．美とは美的表価を行なう主観の本性に基づいて一つの物象を測定することである．然るに美的評価は我等の意識の中に在って特異なる性質と作用とを有する一つの事実である．故に我等はこれを一つの特殊なる学術的考察の対象とする権利を有する」と感情移入美学の見地から自説を述べている．ここでは美の評価は人間の意識の中にあって，対象物を主観的にみることによって感じられるものとしている．いま，たとえば，ここに森林があるとする．それを同一の人間が見た場合に，それを見る時の人間の心理状態によって，同じ森林から受け取る感じは異なるものである．極端な場合は“心ここに在らざれば見るともみえず”の状態の時もありうる．人間の意識とか心理的面のみを重視すると，美の感覚というものは主観的にのみ評価されがちである．しかしながら，そこに“森林美”が存在することも，また客観的な事実である．一時の個人的心理的主観だけで美を評価することは注意すべきである．“対象物”と“人間”の相互作用こそ重視さるべきであると思う．

また一方，中井[6]は「第一に自然の美しさとは何んであろう．空，海，山河，あの大自然の美しさ，鳥や花，あるいは人の体の美しさでもやはり自然の美しさなのである．それらのものがなぜ美しいのであろう．この問題はまだ解けきれてはいない．実に数千年の間，人々はこのむずかしい問題の前にわからぬままに頭をたれているのである．しかしいろいろの疑問を抛げかけている．この疑問の数々が，美学の歴史にほかならないともいえるのである」と述べている．とかく“美学”というと，やたら哲学的用語を用いて，簡単な内容をことさらむつかしく表現する傾向があるが，中井は分り易い文章で，美に対する人間の根元的な問いかけをしているのである．

美学は，つきつめると自然美と芸術美の本質を究明することであり，両者の美は対象を異にはしているが，そこには美という共通なものを追究するということで，一致点を見出すことができるのである．

要約して表現すれば「美学とは，自然美や芸術美とは何んであるかを究明する学問である」と言えるのである．しからば，森林を対象とした美学，すなわち森林美学はいかにあるべきか．「森林美学は森林美を理念的に究明すると共に，自然林および施業林の美を科学技術的に追究するものである」と簡潔に表現しておきたい．本論文では，具体的に森林美学の歴史と批判，森林美学の本質の項目について，焦点をしぼり論究したいと思う．

## II　森林美学の歴史と批判

森林美学の創立者である Salisch[7] および，わが国における森林美学の研究者である今田[8]の研究を参考にして，ドイツ森林美学に関与した主要な林学者の業績を記し，森林美学の歴史的な流れを分析し，筆者の見解を明らかにしたいと思う．なお，イギリス，アメリカ，ソ連，わが国，についてもふれてみたいと思う．

森林美学に関しては，ドイツの最も初期の林学者である Carlowitz(1645－1714)が先駆者的役割を果たし，それについで Suckow (1722－1801)，Trunk (1745－1802) 等も森林施業林の美の問題について強い関心を示した．その後，Borch(1771－1833)は1824年に“Sylvan”誌上において，森林美に関する研究を報告し，1830年に「Die Aesthetik im Walde」を発表した．彼はこの論文で，森林美の概念のみならず，森林美の具体的な取扱いについても述べている．ほぼ時を同じくして，König (1776－1849) は，1849年に「Die Waldpflege aus der Natur und Erfahrung neu aufgefasst」の中で「Ein Wald in seiner höchsten forstlichen Vollkommenheit ist auch in seinem schönsten Zustande」（林業的に最高に完全な森林は，また最も美しい状態にある）と，味わうべき言葉を残している．この短い文章をみると筆者は体験的に思うことがある．それは数学の問題を解く場合，最終的には答がきまっている．しかし，これを解く方法としては種々な経過が考えられる場合がある．この場合“解”を求める“経過”には最も美しい解にいたる経過が存在する．そういう解を得た場合の喜びはまたひとしおのものがある．数学にも美があると言えば心当りの人には分ると思われる．森林を取扱う場合，施業林の成長過程に関して，同じような“美の意識”を感ずることがある．ついで，Burckhardt (1811－1879) は1855年に「Säen und Pflanzen」の中で，「Stets möge die Waldverschönerung den Wald auch bleiben lassen！」森林美化は常に森林をして森林らしくすべきである！）と言っている．これは，禅語録にあるような言葉であるが，言わんとしているところは理解できる．彼は森林施業はあくまでも経済的目的を主眼とすべきで，副次的に美化すべきであるとの見解を持っていた．その後，Kraft (1823－1898) は Urwald と Wirtschaftwald の美を比較して，前者より後者の

方が美的にすぐれていると述べた．また森林の取扱を(1)公園施業，(2)第2施業型，(3)施業林，の3種に分類した．(1)においては森林美そのものを実現する場とし，(2)は森林美を第1とし，同時に森林利用をも念頭においた．(3)では森林利用を主目的とした．また Ney (1841－1915) は1855年に「Die Lehre vom Waldban」をあらわし，この中で「Die Holzarten der Waldverschönerung」の章をもうけて，樹木の葉,花の形態，色彩等について述べていることは注目に価する．

筆者は森林樹木の色彩に関する研究を実施しているが，樹木の新芽，葉，花，枝，幹等の色彩は樹種により，季節により変化にとんでいるものである．森林美学においては，今まであまりやられていない樹幹の色彩を測定することが肝要なことを感じている．ヤマザクラ，ミズメにみられる，アズキ色に白い小斑点のある樹幹，カゴノキ，バクチノキ等にみられる樹皮斑点模様，サルスベリ，ナツツバキ，リョウブ，ヒメシャラ等にみられる滑らかな赤褐色と灰色のまざった樹皮，アカマツの赤褐色の樹皮，シラカバ，ダケカンバ，ブナ等の白い樹幹の色彩等，森林内において美観を与えているのである．

Borch から Ney までの研究者は林学者であり，森林美について関心を示した一連の学者である．森林の生命体に接し，造林とか伐採を通して，森林美にひかれたその心情は理解することができる．

しかし，彼等はあくまでも，林学の副次的なものとして森林美にふれているものであって，いまだ森林美学の体系を創成するにはいたらなかったのである．しかし，約100～300年以前から林学者が森林美について関心をいだいていたのは注目すべきことである．

Salisch[7] (1846－1920) は1885年に "Forstästhetik" の不朽の名著をあらわし，森林美学の学問的体系をととのえ，集大成したのである．そしてまた，森林美学は林学科の中に正科としておかれるべきことを強調した．初版は1885年であるが，1902年には改訂2版を出し，1911年の改訂版では，初版を増補改訂し，内容的にも豊富なものとしたのである．本論文でも改訂3版を参考にした．彼は森林美学の理論的な面にもふれているが，自分の山林を持って，自ら実験を行なったのである．この実践による体験の裏づけが，理論と実際との調和をもたらし，後世に与えた影響力には甚大なものがあった．施業林の美と経済性の調和にも意を注ぎ，次のような注目すべき意見[7]を述べている．特に正確を期するため，原文と訳文とを明記しておきたい．

(1) Die Beachtung ästhetischer Gesichtspunkte sichert vor wirtschaftlichen Mißgriffen, weil man mit dem Streben nach dem Schönen, welches zur Vollkommenheit führt, das Gute und damit das Zweckmäßige gleich mit erreicht.

(美的な配慮をすることは，施業経営上の誤りを防ぐ，なんとなれば，完全なものへと導いてくれる美を目的として努力すれば，善と同時に合目的なものも創成されるのである)

この根底にあるものは，哲学的な真・善・美の思想である．林業技術的には大面積の一斉同令林より，混交林が施業的にも美的にもすぐれているとし，特に保残木作業に真・善・美なるものをみている．

(2) Die Dienstfreudigkeit der Beamten hängt mit ab von der Schönheit des Revieres.

(林務官の職務上の満足感は，管理区域の美と関係がある)

これは，何の仕事でもそうであるが，人間が真剣に努力し，その成果があらわれた時の喜びは "鋭い喜び" であり，心理的に満足感を与える．その意味において，森林と真剣にとりくんだことのある林務官にとって，森林美をまのあたりに見た時の満足感には測り知れない喜びがあるのである．

(3) Die dem Walde um seiner Schönheit willen zugewendete Neigung der Bevölkerung ist dem Walde in vieler Hinsicht nützlich.

(森林の美によって与えられた民衆の好意は，種々な意味において森林に役立っている)

森林から離れたところに住んでいる都会人にとっては，森林美から受ける感動には大きなものがある．森林美が一般民衆に与える力には測り知れないものがある．

(4) Die Freude an der Schönheit eines nahe gelegenen Waldes macht die Bevölkerung seßhaft.

(近くにある森林の美に対する喜びは，民衆を定住させる)

島根県の匹見町と言えば，西中国山地の西南端にあり，広島県と山口県に接している．この匹見町にはかって天然スギの美林があり林業の町として活気があった．現在はこれがみな伐採されて，過疎に悩んでいる．経済的にも多大な効用があった美林がなくなった時，民衆が定住しなく，過疎になったのもうなづけるところである．

Wappes(1860－1952) は1877年に「Uber die ästhetische Bedeutung des Waldes」の論文を発表した．Salisch が森林美学を林学の一部門として，林学の中に確立すべきであるとしたのに対して，彼はその方法論的立場から反論をしたのである．

森林美学の学問的な位置について，林学の一部門とは

認めず，芸術上の一部門として独立したものであるとの考えに立っている．したがって森林美学は芸術の分野に入れるべきであるとした．すなわち，林業，林学から独立すべきものであるとの考えをもっていた．Wappesの批判は学問的な方法論の問題を含んでいるので，理解できる一面もある．この問題とも関連があるので，岡崎の意見をみてみよう．岡崎[10]は「樹木の性質から林木の扱い方まで知らなければ空論になる森林美論を，美学者や芸術の論評者が自らの中心課題とするはずもないだろう．林業技術者が他の領域の人たちの研究成果を待つことを許されないのは，歴史を顧みれば明らかであり，風致林施業の重要性が緊急である現時点では，自らがそれにかかわらずにはおれないはずである」と言っている．

いわゆる芸術家や画家が森林施業に自らたずさわって，森林美を育成したことは，古今東西にわたり，あまり聞かないところをみても，岡崎の心情は理解できるのである．しかし林学者としての Wappes が早くから森林レクリェーションの考えをもち，人間の立場を重んじたことは注目すべきである[11]．

森林美学が森林と芸術との境界領域にありながらも，森林美学が森林美の本質を理念的に明らかにすると共に，施業林の美を如何にして育成するかという自然科学的技術面を持っていることを考えれば，Salisch の考え方が Wappes の考え方より現実的なものと言うことができる．その後88年を経て，わが国の東京大学に森林風致計画学講座ができたことを思うと，感慨ひとしおのものがある．

歴史的観点から，ここで戦争による森林美学研究の中断を述べる必要がある．戦争に関する定義はいろいろあるが，筆者は「戦争は国家，民族が相手の意志を克服するためにあらゆる暴力を結集して，勝負をきめるものである」と表現しておきたい．かかる戦争，第一次世界大戦（1914－1918），第二次世界大戦（1939－1945）があり，この前後を通じて，平和的な森林美学の研究が進まなかったのは当然のことである．戦争こそ暴力破壊のさいたるものであり，祖先が営々として築きあげた文化遺産や森林を人間の暴力で破壊してゆくのである．世には戦争に利用され易い，またそのための学問とみられるものもあるが情ない限りである．この観点に立つかぎり，森林美学と戦争は相入れないものであり，森林美学は人間の真の資産であり，また真の文化に役立つものである．

森林美学に関しては，戦前，戦中，戦後を通じて，今日にいたるまで，Salisch に匹敵し，またこれを超えるような業績はみられないのである．

その後，1968年に Buchwald と Engelhardt[12] による，Handbuch für Landschaftspflege und Naturschutz が出版された．これは自然保護に関する集大成であり，広い視野からよくまとまってはいるが，森林美学に関して言えば物足らないものを感ずる．

そして，1970年に，Zundel と Kettler[13] による，Landschaftspflege-und Erholungsmassnahmen im Wald がある．内容が簡潔であり，休養施設面では参考になる．

イギリス[14]においては，古くは，林学者である Eveiyn（1620－1706），Brown（1716－1783）等が先駆者的役割を果し，その後，1791年に Gilpin が「Remarks on forest scenery and other woodland views」をあらわし，森林風景美の問題を Hampshire における現地観察の報告とした．その後，視野の広い造園学者である Repton[15]（1752－1818）が自然風景式庭園の造成に大きく貢献したのである．彼は自然風景の写生図を画き，それを修景した場合に，どのようになるかを図で示し，比較して，イギリス自然風景園（森林を含む）の造成を実践したのである．所謂，自然林が美しくない場合も時に見られるところである．

近頃では，1956年，Edwardson による「Amenity and Forestry」，をはじめとして，Barrington による「Forestry in Relation to Landscape」（1957），Thom による「Wealth and Beauty in New Forests」（1962），Edlin による「Amenity Values in British Forestry」（1963）等の研究がみられる．また総括的なものとしては1967年 Miles による「Forestry in the Englisch Landscape」がある．

イギリスは島国であり，その地形からしてけわしい山岳はない．田園と関連をもった林が風景の主体となっている．したがって自然風景的造園の面において森林美が生きているのである．

アメリカは森林美学的発想よりは現実的な自然資源の保護の考えを持ち且つ実践している．宮脇[16]によると「エマーソン（R. W. Emerson 1803－1882）は，人間と自然の共存，連帯関係の重要さを強調し，アメリカにおける自然保護思想の先駆的提唱者であった．連邦議会で1842年に自然資源の賢明な活用について提言したマーシュ（G. P. Marsch）は“人類と自然”というかれの著書の中で“人間が自然界のバランスを無視して森林伐採をくりかえしたときには，土壌の水分は失われ，緑の国土は裸の荒野になるであろう”とヨーロッパ各地での見聞を基礎に，“小アジア，北アフリカ，ギリシャでは，人間が自然を破壊して，緑豊かな大地を月の世界のように荒

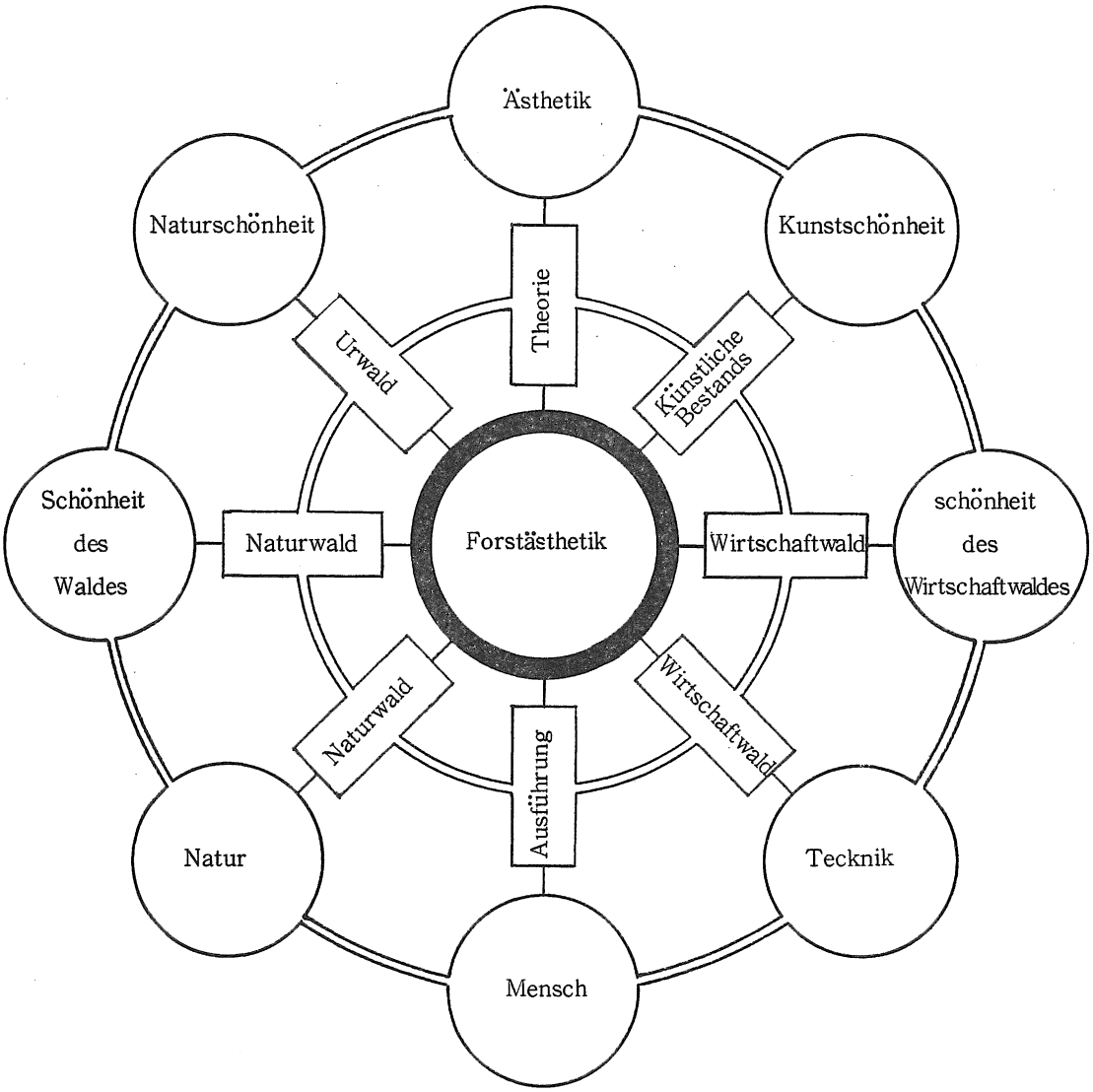


Abb. 1.
Schematische Darstellung der verbindenden und ausrichtenden Tätigkeiten der Forstästhetik.

涼たる死の世界に変えている" と警告している」と記している．

アメリカは1872年には，Yellowstone に世界最初の国立公園を設定し，立法化した．また1890年には Sequoia, Yosemite 両国立公園が相ついで設定された．[17]

1950年に，Allen[18] は「Man's Spiritual Needs and the Forest」の題のもとに，巨大な広葉樹林に小さな一人の人間が立っている写真を示し，「Man goes into its solitude for spiritual rest and inspiration」と記し，森林の精神的効用について考察している．アメリカは実際的な森林保護，および森林レクリェーションの面において優れている．

ソ連においては Neśterov[19] による森林と人間の寿命に関するユニークな研究もみられる．神山[20]によると「ソ連のキエフ都市計画人民研究計画研究所において，カシの木からフィトンツィドを積極的に循環器系の病気の治療に利用しようとして，どのようにカシの木に囲まれた環境を作ったらよいかといった研究が進められている程度である．だが，実際に森林中に入っていけば気分がよくなるし，一定の良好な影響が与えられる．前述したように，樹木からはかなりの量のテルペン系の物質が発散され，その香気は気分をおちつかせてくれるようであ

る」と述べている．

ソ連において，"森林"と"人間の保健"との関係を重視し研究しているのは注目すべきである．

わが国におけるこの分野では，新島善直・村山醸造[21]による「森林美学」，田村剛[22]の「森林風景計画」，今田敬一[8]の「森林美学の基礎問題の歴史と批判」，岡崎文彬[23]の「森林風致とレクリェーション」などの労作がみられる．

元来日本人は風致の美を発見し，これを鑑賞することは欧米に比して深い面もあったが，森林風致の科学的研究や，風景地の保健，休養的利用面でおくれている傾向がある．森林美学および，この面における発展を期待したいものである[11),24)]．

## Ⅲ　森林美学の本質

森林美学の本質を明らかにするまえに，人間が森林をどのようにみていたかについて，2，3ふれてみたいと思う．日本書紀[25]に「一書曰，素盞嗚尊日，韓郷之嶋，是有金銀．若使吾兒所御之國，不有浮寶者，未是佳也，乃拔鬚髯散之．卽成杉．又拔散胸毛．是成檜．尻毛是成柀．眉毛是成櫲樟．已而定其當用．乃稱之日，杉及櫲樟，此兩樹者，可以爲浮寶．檜可以爲瑞宮之材．柀可以爲顯見蒼生奥津棄戸將臥之具．夫須噉八十種，皆能播生．于時，素盞嗚尊之子，號曰五十猛命．妹大屋津姫命．次柧津姫命．凡此三神，亦能分布木種．卽奉渡於紀伊國也．然後，素盞嗚尊，居熊成峯，而遂入於根國者矣．棄戸，此云須多杯．柀，此云磨紀．」とある．

ここに古代日本人の樹木，森林に対する思いが，神話のかたちで鮮かに表現されている．あの時代に，すでに播種造林や木材の性質を生かした利用面が記されているのは興味深いものがある．また朝鮮より，わが国の方が森林植物の繁茂に適していたこともうかがい知ることができる．

また一方，今から約1150年前に中国であらわされた臨済録[26]にはつぎのような禅言がみられる．

「師栽松次，黄檗問，深山裏栽許多，作什麼．師云，一與門作境致，二與後人作標榜．」臨済が深山に松を植えていたのを，黄檗がどうするのかと問うた．それに対して臨済は答えて，一つには寺の境内に風致をそえ，もう一つには人々の標榜にしたいと言ったのである．古い時代に，樹木を風致的見地からみているのは感銘深いものがある．

また，レオーノフは[27]「諸君の中からは，評価を絶した教育者や実際活動家が現われるでしょう．なぜなら，森の創造者や保護者をつくり出すことは，森そのものを育て上げるよりも，遙かに重要だからであります．いかなる入門書といえども，森をも含めた祖国の自然の美が有する意義を説いた序文のページがなかったら，十分なものとは言えません．もし自分の生徒たちに，科学の中でも最も積極的かつ高潔なわが林学を教え込むことが出来なかったら，それはよくない教師ということになります．森は祖国という観念の中に入っているので，愛国心は常に祖国のために注入された個人の努力の量に比例するものであるということを根気よく少年たちに説いて聞かせなさい」と述べている．ソ連の森林について，レオーノフの考えがよくあらわれている．森林に関する教育が如何に重要であるかを述べ，森林の精神的効用を強調している．

しからば，森林美が人間に与える効用とはどんなものであろうか．人間が森林に真なるものを見，善なるものを感じ，美なるものに心を打たれ，森林に偉大な生命の活力を感ずることである．

森林美をうっとりと眺め，その美しさにとけこむ時，大自然と自己との一体感を感じ，「森林の私であり，私の森林である」との心境にもなるのである．

森林という生命体の美が，人間の心を豊かにし，美しくする．そこでは人間は高度の悦楽にひたることができ，明日への生きる力を与えられる．ここに森林美の本質的効用があるのである．

「山河慟哭」という言葉がある．この言葉には何かうったえるものがある．戦争で尊い命を失った人々を悲しんで，山河が慟哭するのであろうか．或いは人間による侵害，汚濁に対して山河が慟哭するのであろうか．この「山河慟哭」を「山河微笑」にかえることこそ「森林美学」の使命ではないのか．かって釈尊が霊鷲山における説法の場で「拈華微笑」をしたという古事も，その心において，共通のものを感ずるのである．

このような森林の美を造成し維持しようとする人間の努力こそ肝要である．森林はその美によって，人間の心に作用し，人間の心を豊かにし向上させるのである．

特に，ここで強調しておきたいことは，森林美が人間の意識に作用を与え，また人間が森林を技術的に美しくすることができることである．この森林と人間との相互作用こそ重視さるべきである．

森林美学を中心として，美学，自然美，芸術美，自然林の美，施業林の美等の相互関係や活動範囲ともいうべきものを示すと第1図の通りである．

Salisch[7] は森林美学の定義について次のように言っている．

「Forstästhetik ist die Lehre von der Schönheit

des Wirtschaftwaldes. Sie soll zeigen, worin desen Schönheit besteht, wie sie zu pflegen ist und wie man die schönen Waldungen zu Nutz und Frommen der Menschen zugänglich machen kann」

（森林美学は施業林の美に関する学問である．その美の成立するところ，またどういう風に育成するか，そして，どのようにして人間の利益のために，美的な森林を人間に親しみやすくするかについて示すべきである）

Salisch が森林美学の中心課題として，「施業林の美に関する学」としたことは，彼が森林と人間との関係において，人間の技術が森林美の発揮に欠かせないものであり，その中心課題としたのは卓見と言うべきである．ただ定義としては，自然林等をも含めて，もうすこし範囲を広げた方がよいと思われる．

新島・村山[21]は「森林美学は森林に関する一切の美的活動を研究する学である」とした．これは広義に過ぎ，その焦点が明瞭でなくなるおそれがある．

諸学者の意見を参考にして，ここで筆者の森林美学の定義を簡潔に表現しておきたい．

「森林美学は自然林と施業林の美に関する学問である」ここでいう自然林の美は，自然林，二次林等，人工のあまり加わらない森林である．自然がつくりあげた森林の美についても科学的に究明する必要があるのであり，これを包含したものである．施業林の美は，森林と人間の相互作用により作りあげられた森林美である．

それ故に森林美学や森林風景の育成は，われわれに新しい社会的責任をもたらすものである．おわりに，森林美学の課題として，樹種の選択，作業種，育成方法，伐採面の形，等が重視さるべきことを強調しておきたい．

## Ⅳ 参 考 文 献


1. 井島　勉：美学　創文社　東京　1958，p.3
2. 竹内敏雄　編修：美学事典　弘文堂　東京　1972，p.1－130
3. ヘーゲル・竹内敏雄訳：美学　岩波書店　東京　1961，p.4
4. 中村　一：自然美の理論（京都大学・学位論文）1975，p.4
5. 阿部次郎：美学　勁草書房　東京　1975，p.25－32
6. 中井正一：美学入門　朝日新聞社　1975，p.9－12
7. SALISCH, H. : Forstästhetik. Julius Springer, Berlin, 1911, S. 1－434
8. 今田敬一：北大農学部演習林報告 **9** (2) ：1－231，1934.
9. 山科健二：日本林学会関西支部講演集**10**：1－2，1971.
10. 岡崎文彬：林業技術 (6)：7－8，1973.
11. 山科健二：日本林学会誌 **51**(10)：280－282，1969.
12. BUCHWALD・ENGELHARDT : Handbuch für Landschaftspflege und Naurschutz. Band. 2. Bayerischer Landwirtschaftsverlag, München, 1968, S. 112－120
13. ツンデル，ケトラー・畑野健一訳：森林の風景保育と休養対策　日本林業技術協会　東京　1968，p.15－102
14. MILES, R. : Forestry in the Englisch Landscape. Faber & Faber, London, 1967, p. 15－288
15. REPTON, H. : The Art of Landscape Gardening. Houghton Mifflin Co, Cambridge, 1907.
16. 宮脇　昭：植物と人間　日本放送出版協会　東京　1970，p.106－108
17. 東京大学造園学研究室：森林レクリェーション（文献集）1964，p.71－79
18. ALLEN, S. N. : An Introduction to American Forestry. McGRAW-HILL Book Company, INC. New York, 1950, p. 9－10
19. NESŤEROV, V. G. : Les idolgoletie čeloveka. Izdatelstvo 'Lenaja Promyšlennost'. Russ. N.L.L, Moscow, 1964, C. 1－85
20. 神山恵三：科学朝日　**40**　(5)：81－85，1980
21. 新島善直・村山醸造：森林美学　成美堂　東京　1918，p.55－553
22. 田村　剛：森林風景計画　成美堂　東京　1929，p.9－230
23. 岡崎文彬：森林風致とレクリェーション　日本林業調査会　東京
24. 志賀重昂：日本風景論　岩波書店　東京　1937，p.27－308
25. 坂本太郎他校注：日本書紀（一）神代上　岩波書店　東京　1967，p.126－129
26. 朝比奈宗源訳註：臨済録　岩波書店　東京　1935，p.159－161
27. レオーノフ・米川正夫訳：ロシヤの森　上　岩波書店　東京　1950，p.374－377

## Zusammenfassung

In der voliegenden Arbeit sollen Geschichte der Forstästhetik, Wesen der Schönheit des Waldes und Aufgabe der Forstästhetik behandelt werden.

Forstästhetik ist die Wissenschaft von der Waldschönheit und der schönnheit des Wirtschaftwaldes.

Eine schematische Darstellung der verbidenden und ausrichtenden Tätigkeiten der Forstästhetik ist in Abbildung I dargestellt.

Es wird Aufgabe künftigen Unterschungen sein, für die Wahl der Holzart, die Betriebsarten, die Bestandspflege und die Form der Nutzungsfläche zu untersuchen.

Die ästhetischen Aufgaben und die Landschaftspflege des Waldes bringen fortwahrend neue Verantwortungen.